ハイライト

小田たつえ

家に一人取り残された私は、あいにくチャーハンを作るための卵も、油も、小ネギも無かったことに気づいた。さすがに今日は食わないと体を壊す。絶食生活四日目にして、白旗を挙げざるを得なかった。二日目の時点で必要な仕事もままならなくなり、基本的に水を延々と飲む生活が始まった(書き始めた私は気づいた。いや水飲んでたらすぐには死なないわ、と。どっかの死にかけたロシア兵が露土戦争で脚撃たれて生死の狭間をさまよったとき、水を飲んで生き残ったくらいだし)。

幸い実家には二リットルペットボトルがいくつも、ほかにも経口補水液だの、缶ジュースもごろごろと冷蔵庫で今か今かと、その誰かの体内をめぐる時間を心待ちにしていた。

そんな時にテレビを点けてしまったのが、絶食生活敗北の原因となった。夕方の、あの決まりきった面々が街巡りをする番組。まさかありきたりもありきった、あんなものに屈服するとは。厨房で中華鍋に躍る飯。中華皿に盛り付けられた黄金の半球。それをほおばる安いタレント。飯そのものだけじゃなく、色の綺麗なその肌や画面越しの楽しげな様子にも負けたんだろう。ああもう、完敗でいいよ。勝手にしてくれ。

原付の鍵が見当たらない。玄関の鍵入れにもない。リビングにもない。とりあえずヘルメットは装着した。財布も持った。買い物鞄も持った。仕方がないので歩きで行こうか。一応原付も確認しておこう。カバーをばさりと取り外す。

「あ、またやったわ」

鍵は、挿しっぱなしだった。

原付は良い。バイクほど難しいことを考えず乗れる。しまっておくのも簡単だし、維持費も安い。これがあれば日常生活にも苦がない。こうしてちょっと遠出の買い物もできる。

赤信号。スマホに打っておいたメモを確認する。チャーハンづくりのための材料が並んでいた。買い物のルートも決まっている。向かうのはいつものスーパー。通る道も決まっていた。昨日の雨はまだ道路に少し湿り気を与えていてに鼻腔に湿気を漂わせる。空色は赤色を呈し始めていて、たしかこんな空は一週間ぶりだったかな。茜に相対する青信号が目に入り、発進した。

丁字路に差し掛かる。昔通っていた中学校を脇に走る。私は、しばらく中学校の敷地をまわる。スーパーへの近道だった。対面から、陸上部らしき集団が走ってくる。少し道路中央によって避けた。右に曲がる。もうすぐでスーパーの建物が見える。その時には、校門を通り過ぎる。そんな折。

「あれ?」

見覚えのある顔だった。昔はSと名乗っていたけど、数年前に愛する人と結ばれてKと名を変えた先生だった。会うのは、何年振りだっけ。私は成人式に出なくて、中学の同窓会にも出なかった。

「先生」

久しぶりに会って挨拶をしないわけにもいかない気がして、バイクを押してあいさつしに行った。

「ん?あれ、Kさん?」

「お久しぶりです」

「久しぶり。元気してた?」

「ええまあ。先生は?」

「私もまあ、元気」

「何年振りですかね」

「卒業以来だから、　年ぶりじゃないかな?」

「そうですか。でも、ほら、手紙とか年賀状でやりとりしてるから、正直そんな気がしないですよね」
「確かにね」
「じゃあ、私買い物あるんで。先生は、部活ですか？」
「そうそう。私運動もできないのに陸上部の顧問だよ？おかしいよね」
「大変そうですね」
「ほんとね。……あ」
「はい？」
「聞いてもいいかな」
「何ですか？」
「同窓会、ほらKさんいなかったでしょ？それで、せっかく手紙とはいえやり取りしてるのに、会えなかったなって。今度さ、食事でも行かない？ほかの子誘ってもいいからさ」
「あ、いいですけど……。私、中学時代に仲良かった人とは今連絡取ってませんし。それでもいいなら」
「いいよいいよ。ＬＩＮＥ、いいかな？」
「え？あ、はい」
画面でＱＲを読み取った。ローマ字の本名と、子どもらしき丸い画像が出た。
「合ってます？」
「うん。じゃ、また後で連絡するね」
原付をまた押して、手を振ってさよならをする。チャーハンの具材たちは、頭の中でいまかいまかとその字面と実物が一致するのを待っていた。
……とりあえずチャーハンは何事もなく完成した。我ながら良い出来だった。こだわりは、と聞かれると、そんなもんない、と返さざるを得ないけど、結局美味しいことが何よりも重要だろう。あっという間に完食した。
ＬＩＮＥの通知音が鳴る。さっき連絡先を交換した先生からだった。
――Kさん、さっきの話だけど、いつ頃なら予定大丈夫かな？（十九時八分）
――私は別にいつでも大丈夫です。（十九時八分）
――そっか。（十九時九分）
皿を片付けに行ったら、また鳴った。
――さっそくで悪いんだけど、今週土曜でどうかな？（十九時十三分）
――週末ですね。何もないんで大丈夫です。場所どこにします？（十九時十四分）
少し間があった。
洗濯と食器洗いの準備をし始めた。食器洗いをぱっぱと終えたところで、携帯が鳴る。
――A駅改札前で、十八時とかどうかな？（十九時三十三分）
――わかりました。じゃあ、当日に（十九時三十五分）
チャーハン皿は、真っさらになって食器置きに置かれていた。
A駅改札口は相も変わらず田舎のＪＫたちが闊歩し、その制服を示しながらきゃっきゃうふふと友達に逢う場であった。十七時五十　分A駅着の電車に乗って向かった。改札を出ると、先生の衣をひとりの可愛くありたい三十代の衣を纏って待っていた。
「先生。待ちました？」
「あ、Kさん。大丈夫だよ」
「あの、お店って」
「私が知ってるお店があるんだ。行こ」
可愛くありたい。そんな感じだった。薄めのチークは、疲れているはずの教師の仮面を、血色よくみせていた。
「しかし先生、なんで突然誘ったんです？」
「え？だって何年ぶりかに仲の良かった生徒に会ったんだよ？しかも偶然さ。んで、同窓会にもいなかったじゃん？そりゃあ、ね？」
「そういうもんなんですか？」
「そりゃそうだよ～」
嬉々としたS，じゃないK先生は、たしかにかわいらしい。女の子、と言った方が近い気がする。
少し歩いた。十分くらいか。ホテル直轄のいい店だった。
「奢る」
「先生いいですって。私お金ないわけじゃないですから」
「だって元教え子に払わせるのなんて嫌だよ、私」
先生は予約をしてくれていた。若干びくつくくらいの豪勢な料理がコースで出てきた。
「美味しいですね。さすがはホテル直結なだけある」
先生がほほ笑んだ。
「どうしたんです」
「ううん。昔はあんまり笑わない子だったでしょ、Kさん。けど、今は表に感情出してくれるんだなって」
「先生だからですよ。それもよしみの先生の前だからですって。初対面の人には相変わらず話すのもできないですし」
「ほんと？喋りが上手そうなイメージだけど」
「あくまでイメージじゃないですか。本当はそんなこと一切ないですから」
「……そういうところも、昔と変わらないんだね」
赤ワインを口に注ぎながら、乙女の微笑を浮かべた。

飲み過ぎたらしい。少ししかない高さがないヒールですらおぼつかなくなっていた。
「Kさん?」
「どうしたんです、先生」
「もう少し飲みたいんだけど、行かない?」
「私は良いですけど、飲み過ぎじゃないですか?」
「ううん。今日は良いの。もう、いいの」
「今日月曜日でしょう?それに子供さんもいらっしゃるんじゃ」
「いいのいいの。ほんと、今日だけだから」
結局、ホテルのレストランからすぐの居酒屋に入った。
「んああ。やっぱ美味しいわ。高いワインよりハイボールよ」
「あんまがっつかないでくださいね。一応さっきも飲んでたんですから」
「わかってるって、心配性だなあ。でも、ありがとね」
酔いで童心にかえる先生が、なんとも不思議で、でもやっぱりかわいげがある。そんな子どものようだった。
「……Kさんさ」
「はい?」
「もしさ、私が手伝ってほしいことあるっていったら、手伝ってくれる?」
「それはまあ、別にいいですよ。時間があるときなら」
「……このあとさ、うちに来ない?」
「え、先生の家ですか。アパートでしたっけ」
「うん。ちょっと困りごとあってさ」
「いやでも、それは先生のプライベートな空間ですから、さすがにちょっと」
「やっぱりそうだよねえ……。さすがにはばかるよね」
「あの、家に入らないんだったら、いいですけど……」
「ほんと?」
「まあ。それくらいだったら問題ないと思いますし」
「んん、じゃあ、この後すぐでもいいかな」
「え、もう夜の十時ですよ」
「いいの、早めに済ましたいの」
「はあ」
あんまりに急かしてくるものだから、なんとも言えない気持ちになる。恩師の願いとあっては正直断れないし、むしろ断るつもりはない。けど、時間や内容もあってすこし憚られる気持ちもある。
「あの、何を手伝ってほしいんです?」
「……荷物、一緒に運んでほしいの」
「え?」
「私、家出するんだ」
へべれけになった先生はぽつりぽつりと事の事情を明かしてくれた。彼氏は子育てに無関心で喧嘩も多くなった。それなりに教師としてのキャリアは積んできたが、ここになって子育てに拍車がかかり続けた。結果、うつの症状に悩まされ、教鞭を取ることがままならなくなった。先日私と再会した時には、既に退職が決定して勤務最後の週だったらしい。要するに、
「私、もう先生じゃないの。んでさ、実家に戻るんだ。F県の」
隣のF県からそのまま出てきた先生は、もう戻らないと限界だった。
「ね、傷とか見ても大丈夫?」
「え、まあ別に」
フリルスカートの裾を少しまくしたててきた。おびただしい生傷がチョークの白線のように残っていた。
「恥ずかしいね。けど、Kさんなら、いいかなって」
「こうやってちょっとだけですけど、手伝いや相談に乗ってくれたから、ってことですか」
「そう、だね。他の人には話せないし。年上じゃ説得されてどうしてもくれないだろうし、年下なんかなかなか頼れないし」
「でも、私も年下じゃないですか」
「Kさんはいいの。精神年齢がとっくに私の上行ってるから」
「それ、昔から私に言ってましたよね」
「そうだったっけ。変わんないってことだね」
乙女の微笑。私の思い出。今と昔。
二十三時X分の電車で、二人そろって帰った。その間、すりすりと先生は私に寄ってきた。なんでだろう。人目がないからか。酔ってるからか。
「先生」
「少しは人のあったかさが味わいたいんだもん」
少しの嘆息。
「あんまり寄りすぎないでくださいね」
「……Kさん?」
「なんです?」
「死にたいって思ってる人間ってさ、なんでか知らないけど先に先に、って色々とのこそうとするんだよね。だから、内心消えたいって思ってるひとほど、考え方って深いんだろうし、いろいろとのこそうとしてるんでしょ」
「こうやって、僕の記憶に残ろうとするんですか?」
「……考えはないけど、そうかもね」
コインパーキングに停めてあった先生の車を借りた。
「まだ免許取りたてなんですよ。あと、保険も入ってないし」

「何かあったら全部私のせいだから」
「ああ、はい。とりあえず、先生のアパートですね」
「うん。お願い」
誰もいない、田舎の二車線道路。ラジオがかかっていた。
「ね」
「はい？」
「煙草、吸うんだっけ？」
「……正直言えば、はい」
「途中買っていいかな」
「え、あ、はい。先生吸われるんですか？」
「妊娠してやめたけどね」
ラジオはＤＪのいない、ひたすらＢＧＭとして流れるだけの番組だった。
「ほら、そこ。コンビニ」
右折して入った地方チェーンのコンビニ。
「ちょい待ちね」
「はい」
駆けていく姿。レジであれやこれや言ってボックスを買う先生。走って戻る先生。
「ただいま〜」
「おかえりなさい先生」
「ねね、後で一緒に吸わない？」
「え？ああ、じゃあまた後で。今は家に急ぎましょう」
「うん。そだね」
家路を出来る限り早く駆ける、二人。
「先生着きましたよ」
「うん、ちょい手伝って」
「はい」
荷物はに抱え程だった。
「少なくないですか？」
「大半は宅配便で小分けして送った」
「なるほど。あの、旦那さんは」
「あいつはもういい。行こ」
「お子さんは」
「実はね、先週実家に連れてってあげたんだ。いろいろ話して、私の親も分かってくれたから」
「ああ、ならよかった」
「子供思いね」
「育ての親にはかなわないですけどね」
「そんな」
また笑った。何でこんな笑ってるんだろう。この前までチャーハンづくりすら危うかった人間が、恩人のために危険を承知で夜道を走っている。飢えてみようかと思ってたやつが、心も身も傷ついた先生を助けているなんて。皮肉だけど、こうもコロコロ変わるのが人間なんだろうか。
かっ飛ばして高速道路に入り、北へ北へと走らせた。ラジオの周波数帯がうつろう。
「Ｋさん？」
「なんです？」
「どっか、パーキングエリアにでも寄らない？トイレ行きたいの」
「あ、オッケーです。あと三キロ先にあるんで、そこに寄りましょう」
高速道路の三キロは短めの曲が一曲終わるくらいである。最近のヒットチューンのアウトロが終わったところで停車した。
「トイレ行ってくるね」
「はい」
足取りは駅の時よりもだいぶマシだった。さすがに一、二時間もすりゃそうなるだろう。喉が渇いて、見つけた自販機に銀貨と銅貨二枚を流し込む。体に流し込む黒いアイツの缶を手に取る。
ふと、喫煙所を見つけた。ポッケの中から火を出して、鞄から暗赤色のパッケージを出す。こんな夜中で当然だが、室内にはだれも居なかった。
「先生まだかな」
と言った間もなく、ぼんやりと明るいトイレから、独りの女性が出てきた。
「あ、先生車の方に行っちゃう」
灰皿の上に吸いかけを丁寧に置いて、先生を呼んだ。
「あー、吸ってるー」
駆け寄ってきた。
「私も、いいかな」
うなずく私。嬉々として箱を出す。
「一つ思ったんだけど、お子さんって幾つでしたっけ」
「四つだよ」
「ああ、ならいいです。けど、子供の前では吸わないでくださいね」
「しないしない。今日だけだって」
「ん。じゃあ。先生、何買ったんです」
「昔吸ってたのと一緒。ほれ」
アスタリスクが消えて、殺風景になったパッケージだった。
「パケ、面白くなくなりましたよね」
「わかるわー。……あ」
「もしかして、火ですか」
「買い忘れちゃった」
「点けますよ」

「ふふ、お言葉に甘えて、ん」
咥え煙草の先に灯をともす。自分の吸いかけを取り、また吸う。少ししか残っておらず、二本目に向かった。
「連チャンで吸うのはよくないぞ」
「いいんですって。今日くらいは」
お互い、黙って吸っていた。先生の、とろんとした瞳が、得も言われぬ夜中の空気に溶け込んで、乙女と女を行きかう。
「あ、やば」
吸っていた一本を落としてしまったらしい。
「あ、もう一本吸います？」
「ええ。……お言葉に甘えてもいいかな」
「別にいいですよ。誰も急いでないし、夜は長いですから」
「ん」
また灯をともそうとする。
「……あれ」
「どしたの」
「すんません、オイル切れです」
「あ、じゃあ、ほら、それで点けて」
「え、どれですか」
「口のそれだよ」
要するに煙草で煙草に灯をともせ、とのことだった。
「え、あ、できますかね」
「ほれ、近づけて」
僕の口を先生の煙草に引き付けられる。近い。
「しっとしちぇちぇ（じっとしてて）」
少しばかりすると、熱が移った。
「ふふ。ありがと」
赤面。先生と元教え子という境界線があるんだから、さすがにそうなる。
「……んー」
「どうしたんです？」
「Kさんさ、それ吸わせて」
「僕のですか」
「たまには他のも吸いたいの」
「あ、じゃあ新しいのを」
「違う。今吸ってるその一本」
「は？」
「交換っこよ」
指に挟んだ一本をぶんどられ、先生のハイライトが口に入る。もうなんだかわからなかった。もう、黙り込んで吸うしかなかった。
その一本が、終わった。
「先生、それじゃ行きましょう」
もじつく先生。視線が床に向いて、動こうとしない。
「キスして」
「え？」
「して」
「なんで」
「して！」
何も、考えが追いつかなかった。脳なんて、とっくの昔にオーバーヒートしていた。
「……わかりました。しますよ」
「……お願い」
少しだけ屈みこんで、紫煙の薫りに包まれた口元が、結ばれた。
「……ずっと、寂しかった」
「……こんなんじゃあ、救われませんよ」
「今いいなら、それでいい。今は」
撫でて、泣いて、傷をなめあった。それで、少し夜の霞が、晴れるなら。それでよかった。
車は夜中の三時に最寄り駅に着いた。
「私、ネカフェにでも行って一晩過ごすね」
「はい。あの、気を付けて。今後は、もう会えませんでしょうし」
「連絡先知ってるんだから、そりゃないでしょ」
「ああ、そうでしたね。またなんかあったら連絡ください」
「また元気になったら、会お」
「わかりました。車は、そこの駐車場に停めておきましたから。鍵は渡しましたよね」
「うん。ここにあるよ」
万事オーケー。
「Kさんは、このあとどうすんの？」
「街でも歩ってます。始発で帰ります」
「Kさん」
「はい？」
「私、謝らなきゃいけないの」
「何をですか」
「私、」
先生との手紙は、一切出せなくなった。ＬＩＮＥの方も、機種変のせいで分からなくなった。連絡もない。
――過ぎた事だから。そんなに自分を責めないで。
先生と生徒の関係は、この世で比較的良い方の関係だと思っていた。けど、結局他と変わらない。易々と燃えてしまう。でも燃え残りはまだ大切に取ってあって、そのおかげで、今もある気がする。

≪おわりに≫

半分以上が二時間ほどで書きあがった珍しい作品です。なんででしょう。わかりません。ですが手癖がひどく、果たして読者の皆さんがしっかり読んでいただけるほどの作品であるかと問われると正直解らない次第です。

さて、実は執筆終了の時点でいくつか質問が浮かんでいます。なので、ここに記しておきます。

①主人公の性別は？
②あなたの考えるK先生の顛末とは？

という感じです。

執筆の経緯は、いつかお話ししましょう。ちなみに二時間で書き上げた範囲は二ページ目の「先生は予約をしてくれていた。」から最後までです。真昼間に書き上げたのは私にとって珍しいことでした。

長くなると嫌われるのでここで終わりにします。では、さようなら。

二〇二〇年九月二十八日